諏訪中央病院広報誌

たんぽぽ

ご自由にお持ちください

2024.7

第234号

諏訪中央病院
Suwa Central Hospital

report

特集 医療安全

副院長／小児科部長
医療安全管理部長
佐藤 広樹 医師 に
インタビュー

■諏訪中央病院には患者さんに安心して当院を利用していただくため、職員が安全な医療を提供できるように活動している部署があります。
それが医療安全管理部です。
医療安全管理部は、日々の活動を通して、安全な医療の確保をはかり、医療の質の向上をめざしています。
■今号では、この春あらたに医療安全管理部長に就任した佐藤広樹副院長に新部長としての抱負や医療安全に対する想いをインタビューしました。

先生の略歴とこれまでの活動について教えてください

佐藤：平成15年から3年間、そして平成21年から再度この病院で働いています。医療安全以外では虐待対応やハラスメントの啓発活動、母乳育児の推進などにも関わってきました。

虐待対応では、院内のプロトコール整備や勉強会などの周知活動、適切な機関へのつなぎを行っています。ハラスメントについては勉強会や啓発活動を行っています。虐待やハラスメントに関わる仕事は、支援が必要な人を認識し、困っている方への援助が円滑に進むよう努める、だいじな業務と考えます。母乳育児については、当院は2015年に「赤ちゃんにやさしい病院」に認定されました。現在は池田先生（産婦人科医長）に委員長を譲りましたが、引き続き関わっています。臨床研究・研修センターでは、人材育成にも取り組み「教える側を教える体制づくり」を行ってきました。まだ十分に構築できていない部分もあり、今後の課題です。

4月から副院長と医療安全管理部長に就任されましたが

佐藤：医療安全は小児科部長としてセーフティマネージャーになり、講演会の設営を手伝い始めたのが最初です。行けば真面目に聴く方なので（笑）、せっかくだからなにか学んで帰りたいとメモを取って勉強していました。

当時、高木先生（前副院長／医療安全管理部長）が医療安全文化を根付かせようとしていて、なにかあったらレポートを書こうという運動がありました。書くと喜んでもらえたので、乗せられてレポートを書くようになりました。実際に書いてみると解決できたこともあれば、うまくいかないことやトライしてもらったけどだめだった、という事象がたくさんあることに気づきました。小児科研修中の研修医や専攻医がレポートの書き方を知らないことも多く、その指導を行うようにもなりました。ただ当時は、責任者になるとは思ってもいなかったんですけどね。

2年前に、就任の話をいただきました。やり始めると、さまざまな場所でさまざまなことが起きていることがわかり、勉強の必要性を感じました。研修や学会に参加して医療安全管理者や医療メディエーターにもなりましたが、まだまだ学びが必要だと感じています。

医療安全という言葉にネガティブなイメージを持つ方も多いでしょうか

佐藤：医療は人が行うものなのでミスは避けられません。医療安全では「人は誰でも間違える」とした上で、その前提に立ちながらも、いかに患者さんに影響が及ばないシステムを作るか、というのを永遠の課題としています。誰かが途中で気づけば、それはシステムが上手く働いたということになると思うのです。

ただ患者さんは「医療安全？　当たり前でしょ！　間違えるなんてとんでもない」と思っていますし、全くそのとおり当然ですね。ですから医療安全は医療者だけでなく、相互の協力が必要です。例えば薬が飲めなかったというインシデントの場合は、配薬の状況や飲み込みを確認し原因への対応を考える。患者さんの誤認予防も、今では多くの患者さん自身が協力してくださるようになりました。

当院の医療安全の文化、取り組みはいかがですか

佐藤：他院では人手が足りないことも多い部署ですが、当院は専従セーフティーマネージャーが助けてくれるのでありがたいです。病院が医療安全へ理解をしてくれているからこそだと思います。医療安全で大切とされている「報告の文化」が根付いているのも特徴で、インシデントレポートもよく出ています。医師の提出が10％以上、年間述べ2000枚の提出という状況は、目標を大きく上回っていて、これを維持していく努力が必要です。

5月に行っている医療安全の日は、当院で発生した重大インシデントをきっかけに設けられました。入職時にオリエンテーションで医療安全の重要性を伝えていますが、職員全員に事件を風化させず、医療安全の大切さを伝える機会として、とても意義のある、大切な場になっています。

実際に働いていて、報告のしやすさを感じます

佐藤：当院はもともと医師やコメディカルとの垣根が低いですよね。そこが相談しやすい環境につながっていると思います。医療安全だけで作った文化ではなく、この病院がもともと持っている風土とうまくマッチしていると考えています。

最後に当院の医療安全の展望を教えてください

佐藤：医療安全文化をいかに受け継ぎ、つなげていくかが重要です。医療安全は病院全体で取り組む課題であり、全員が自分ごととして捉えてもらうことが目標です。さらに、地域全体で医療安全を構築し、他院との情報共有や教育体制を整え、広域で取り組むメリットを生かしていきたいと考えています。

医療安全は一人でできるものではないので、チームで取り組むことが必要です。相互の協力を得ながら、患者さんに安心・安全な医療を提供できるよう努めていきます。

（聞き手・編集部　山口俊大）

こんにちは 医療安全管理部です

患者さんとご家族そして職員の声に耳を傾け あたたかな病院づくりを推進しています！

あたたかな病院とはどうあるべきか

医療の現場で起きる
さまざまな出来事を拾い上げて検証…
明日の安心・安全のために活かします

医療安全管理部は…

医療安全管理責任者：１名（副院長）
専従医療安全管理者：２名（看護師・理学療法士）
専従感染対策担当者：１名（看護師）
事務：１名

の総勢５名で構成されています

病院全体で取り組む医療安全

医療安全に関するセクションとして、ほかに医療安全管理委員会、 医療安全推進委員会、各部署の安全管理責任者、医療安全関係者会議などを組織。安心・安全のため、連携し日々努めています。

地域全体で取り組む医療安全

諏訪地域の病院には医療安全ネットワークがあります。病院間で医療安全相互ラウンドや問題の共有・情報交換を行い、医療安全の質の向上につなげています。

医療安全推進委員会

こんな活動をしています

インシデント・アクシデント報告の分析や評価、対策の立案、その周知徹底を行ってます。

各部署にラウンドに行き、現場のスタッフと当該事象の改善策などについて検討します。

さらに、よりよい医療につながる報告をした職員に、Ｇｏｏｄ Ｊｏｂ表彰を行っています。

医療安全ラウンドのようす

また、院内外の講師による職員研修を年２回実施して、医療安全の知識や意識の向上に努めています。

当院では、厚生労働省の定める「医療安全推進週間（11月25日…いい医療に向かってGO！を含む１週間）を拡大し、11月を医療安全推進月間として活動中で、毎年テーマを変えて、かるたや川柳を作成するなど、医療安全の啓発に取り組んでいます。

患者さんもいっしょに

医療安全管理において、患者誤認防止は最重要ミッションです。

外来でも入院でも「お名前をフルネームで教えてください」と患者さんにお願いしています。医療事故を防止するため…ポイントは「フルネーム」で「患者さんご自身に名乗ってもらう」ことです。

医療者側だけでなく、患者さんも一緒に取り組む医療安全が、より良い医療につながります。何度もお名前を確認させていただきますが、医療を安全に行うために必要です。ご理解のうえご協力ください。

ラクに生きるための がん検診

２人に１人が「がん」になる時代と言われます（図１）。男性では胃、大腸、肺、前立腺が多く、このうち大腸や前立腺がんが、女性では乳がん、大腸がん、子宮がんのいずれもが増加傾向です。

さらに、がんによって亡くなる方も増え続けています（図２）。欧米のがん死亡率は１９９０年代をピークに減少に転じていますが、日本では増加傾向が続いており、年間37万人以上ががんで亡くなっています。これにはがん検診の受診率が大きく関わっていると言われています。欧米のがん検診受診率は70～80％ありますが、日本では50％以下です。検診を受けることで、がんによる死亡率は下がると予想されています。

また、検診で見つかるがんは症状が出て病院を受診して見つかるがんより早期であることが多いというデータもあります（図３）。図は大腸がんのデータですが、検診で見つかったがんは60％が早期だったのに対し、病院で見つかった早期がんは21％のみでした。多くのがんは発症初期には自覚症状がないことがほとんどです。徐々にがんが増大して正常な臓器を圧迫したり侵食したり、出血したり皮膚に出てくることでようやく症状が現れるため、この段階で見つかるがんは進行している可能性が高いのです。一般的に、がんは早期であればあるほど体への負担が少ない治療法が選択でき、治療後の再発率も低くすみます。前述の大腸がんで言えば、ごく早期であれば外来の診察で内視鏡でとってしまうこともできます。進行がんは、入院し外科手術で腸ごと大きく切り取る必要が出てきます。その中でも早い段階であれば、傷の小さな腹腔鏡手術も可能ですが、大きくなったり、転移などが出てくると大きくお腹を開ける手術が必要になります。さらに進んでいくと、根治できない状況になってしまうこともあります。男性に多いがんは40歳代から増えてきています。女性に多い乳がんや子宮がんはより早く、30歳台から増える傾向があります（図４）。仕事や子育て、趣味などにも忙しい世代とは思いますが、日本人の半数にとって避けられないがんを、よりラクな治療で乗り越えるためには、定期的ながん検診が必須と思われます。その後の世代ではさらに罹患率が上がるので、やはりしっかりがん検診を受けていただくのが、一見遠回りでもラクに生きるために必要なことではないでしょうか。

（外科　高安甲平）

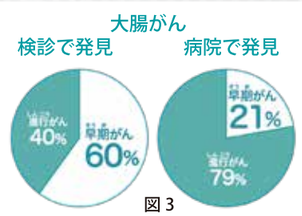


図３

部位	生涯がん罹患リスク(%)		何人に1人か	
	男性	女性	男性	女性
全がん	65.5%	50.2%	2人	2人
食道	2.4%	0.5%	41人	194人
胃	10.7%	4.9%	9人	20人
結腸	6.5%	5.9%	15人	17人
直腸	3.8%	2.2%	26人	45人
大腸	10.3%	8.1%	10人	12人
肝臓	3.2%	1.6%	31人	62人
胆のう・胆管	1.5%	1.4%	65人	72人
膵臓	2.6%	2.5%	39人	41人
肺	10.1%	5.0%	10人	20人
乳房（女性）		10.6%		9人
子宮		3.3%		30人
子宮頸部		1.3%		75人
子宮体部		2.0%		51人
卵巣		1.6%		62人
前立腺	10.8%		9人	
甲状腺	0.5%	1.6%	185人	62人
悪性リンパ腫	2.3%	1.9%	44人	52人
白血病	1.0%	0.7%	99人	135人

図１
国立がん研究センター
がん情報サービス

現在の日本では男女とも生涯で２人に１人が何らかのがんに…

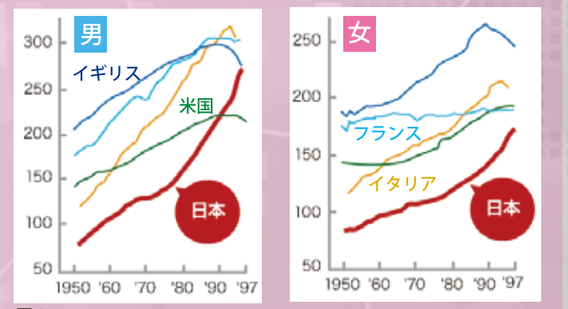
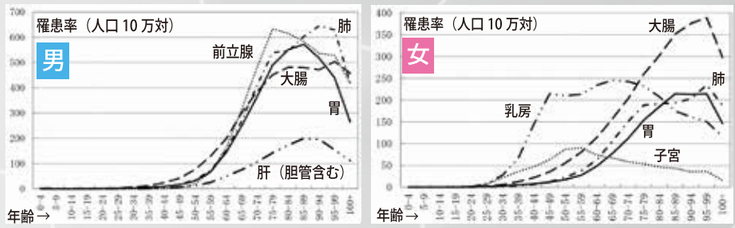


図２
WHO 統計より

欧米では減少傾向のがん死亡
日本では増えています

図４「年齢階級別がん罹患率」 2020 年厚生労働省全国がん登録報告より



第17回

メディメシ☆

医療現場の束の間のひととき

統括院長　今井（いまい）　拓（たく）　先生の回

医療の現場は日々忙しいイメージ。そんな中でのお昼ごはんのひとときにお邪魔し、色々な角度から人物像を探るコーナー。

メディメシ
「メディカル・スタッフ（医療従事者）のご飯」の略

当院では循環器内科医として約年、外来診療やカテーテルアブレーション※を担当しています。業務が大変な時でも、病状が良くなった患者さんの笑顔や、仕事がうまくいっている時の職員の笑顔を見るとやりがいを感じるそうです。諏訪中央病院組合の統括院長として、これからは地域全体が笑顔になれるよう、病院のみならず介護施設、看護学校の看護師育成までを連携し、医療・介護を広く提供できるよう尽力したい、仲間たちと新しいことに挑戦したいと意気込みを語ってくれました。

ランチは、15年以上にわたって奥さまの手作り弁当。前日の晩の残りが詰められていたり、時にはやや不機嫌そうなお弁当（笑）の時もあったそうですが、お昼に十分な時間が取れないことも多く、とても助かっているとのこと。おかず満載で彩りよく、とても美味しそうですね！

多忙な毎日を送っている今井先生は、最近サウナにハマっているそう。スノーボードも好きで、過去に3度の骨折をしたにもかかわらず、楽しく続けているとのこと。リフレッシュにも抜かりなしですね。

「天気の良い日はハーブガーデンなどで地域の皆さんと一緒に、いろいろ話しながら、お昼ごはんを食べたりできたらいいな～！ほかの人のお弁当も、ちょっとつまんだりしてね（笑）」とも。インタビュー中は「笑顔」という言葉が繰り返し使われ、地域・人とのつながりを大事にされていると感じました。

地域に根ざしたあたたかな医療がより充実するよう、笑顔を絶やさない医療人でありたいですね。

※不整脈の治療法。カテーテルという管を血管から通し、原因となる異常部分に高周波電流を流して焼き切る（アブレーション）治療

第4回

鍼灸師のつぶやき

鍼灸師　伊藤（いとう）　美咲（みさき）

今年の夏も暑いですね。夏といえば熱中症！皆様、対策はできていらっしゃいますか？

運動や外での作業はもちろん、室内でも油断はできません。喉が渇いた、と思った時にはすでに脱水状態のことも。なので、水分は少しずつこまめに。休憩は日の当たらない涼しい所を選びましょう。エアコンで室温を調節することも大切です。

それから、首や脇・股関節などを冷やすのは今では有名な対処法ですね。予防にも効果があります。しかし外出先では少し冷やしづらい部位だと思います。そこで、もっと気軽に簡単にクールダウンするには手のひらを冷やすのが効果的です。冷たい飲み物が入ったペットボトルを持つだけでも対策になります。そして、手のひらには疲労を軽減させるツボもあり、そのツボに刺激を入れることで夏バテなどのセルフケアもできます。

皆様には今年の夏も暑さに負けず元気に過ごしていただきたい…。

熱中症予防と一緒に暑さで疲れた身体も労わっていただけたら幸いです。

熱中症対策に！
冷たいペットボトルなどを
手に持つのも効果的！！

ツボ：労宮（ろうきゅう）
手を軽く握ったときに
中指が当たるところ

痛気持ちいいくらいの強さで押す

第15回

減災を身近に
能登半島地震は諏訪地方にも訪れる

防災士　手術室看護師　濱（はま）　貴彦（たかひこ）

今年発生した能登半島地震では家屋の倒壊により多くの犠牲者が出てしまいました。「まさか正月にこんなに大きな地震が来るとは」「まさかこんなに多くの家がいとも簡単に崩れるとは」みなさんもそう感じられたと思います。

私たちの住む諏訪地方では、これから来るであろう南海トラフ地震と、糸魚川静岡線活断層地震に、気象庁から震度6弱の予想がされています。能登半島地震と同じ震度です。ニュースで目にした能登半島地震の光景が諏訪地方にも広がることになります。諏訪市、茅野市、諏訪郡では地震の際、家屋倒壊数がとても多いとされています。（諏訪市マルチハザードマップ・茅野市防災ガイドブック参照　ホームページで閲覧可能）

そうした中で生き延びるにはどうしたらよいでしょうか。

多くの地震から家屋倒壊のメカニズムがわかってきました。

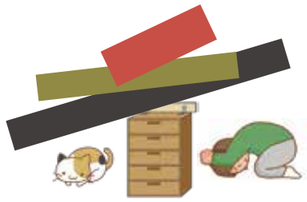
二階建ての家屋の場合、一階部分の柱が同じ方向に倒れ、二階部分が崩れ落ちる、です。決して二階が安全というわけではありません。

倒壊した家屋の中で生き延びた方々は、足の太いちゃぶ台、足の太いこたつ、ソファーなどに身を寄せ小さくなっていたそうです。

また、そうした時は「揺れ始めにしか行動できない」ということを覚えておいてください。とても重要です。多くの方は揺れが大きくなったら逃げる、という考えをお持ちですが、揺れが大きくなった時は、立っていることもできません。

以前私は震度5を室内で経験しましたが、揺れが大きくなった時には2m先まで進むことができませんでした。揺れ始めから家屋倒壊までの時間は4秒から7秒とされています。室内であなたが揺れを感じたら、すぐにしっかりした家具の横に小さくうずくまって頭を守る行動をとりましょう。

日頃からどこが安全か、家族で考えたり話し合ったりして確認しておきましょう。また平成12年以前に建築された家は、現在の耐震基準を満たしていない可能性が高く構造的に危険です。今のうちに耐震診断や補強、修繕などをして大地震に備えましょう。



参考URL「学ぼう！ホームズ君」
YouTubeもあります。ぜひご覧ください

令和６年７月16日発行（隔月発行）　諏訪中央病院広報誌「たんぽぽ」234号　編集発行：たんぽぽ編集部　住所：長野県茅野市玉川４３００番地

＼地域の／
診療所紹介

わたなべ小児科医院

小児科／アレルギー科

住所：茅野市玉川３６５８－１　電話：０２６６-７５-１７５５

【診療内容】
- 小児一般
- アレルギー診療（成人も対応）
- 乳児検診／ワクチン接種

【完全予約制】　電話またはウェブサイトよりご予約ください
https://watanabe-pediatric-clinic.jp/

【アクセス】　駐車場22台あり　諏訪中央病院より車3分

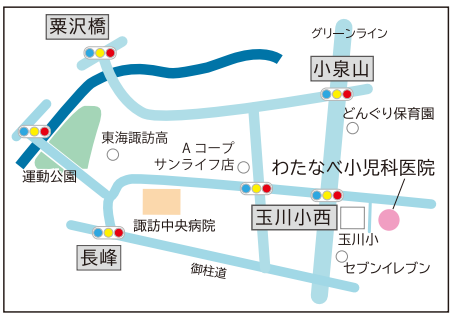
ウェブ予約できます

院長　渡邉 達夫医師

受付時間・曜日	月	火	水	木	金	土
午前　8:30～11:30	○	○	○	○	○	○
午後　3:00～ 6:00	○	□	○	休	○	休

□は専門外来

小児科専門医として風邪や喘息などはもちろん、食物アレルギーや花粉症ほかのアレルギー疾患、そして発達特性の相談など、お子さんの心身の健康を守るために全力を尽くします。また成人の方のアレルギーにも対応いたします。どうぞよろしくお願いいたします。



北山診療所　お盆休診のお知らせ

8月14日（水）～16日（金）、北山診療所は休診となります。ご了承ください。

クラウドファンディング活動報告

昨年12/4～本年1/31に実施いたしました助産院改修のクラウドファンディングでは、目標金額をはるかに上回る約1,600万円のご支援、また多くのうれしい応援メッセージを頂戴しました。心より感謝申し上げます。
ここで、これまでの経緯と改修に向けたスケジュールをお知らせします。
今後も進捗状況をお伝えしていきます。
楽しみにしていただけたらうれしいです。

活動の進捗

4月　病院HPに寄付者お名前を公開
5月　芳名板のお披露目
　　改修業者の募集
6月　寄付金領収書の郵送完了

今後の予定

8月　改修業者の選定　工事スタート
10月　完成

エントランスにて
お披露目中の芳名板